

簿記会計教育における生徒と教員の認識のギャップ

関西大学大学院会計研究科教授 柴 健次

はじめに

本稿は会計リテラシーの研究¹⁾で実施した2つのアンケート調査をもとにしている²⁾。本研究の3名のメンバーは、かつて簿記教育においても類似の調査を行った³⁾。後者の調査では、「生徒が苦手と思う項目」と「教員の判断で生徒が苦手だろうと考える項目」が違うこと。しかも、双方が指摘する苦手項目が間違っているかもしれないことの2つを確認するために、指摘された苦手項目と生徒による項目別に設けた問題の正答率を比較するという「認識の正誤アプローチ」を行った⁴⁾。

これに対して、今回の科研費による調査は、「教員が重要と思う項目」と「生徒が重要と思う項目」とを統計的に差異を検討した。つまり、「認識の正誤」に力点を置くのではなく「認識のギャップ」に力点を置いた。

今回の調査の結論を急ぐと、「教員の思いは生徒に通じていない」ということである。教員における重要度の順位と生徒における重要度の順位が異なったのである。教員の答えた重要度の順位を正しいと考えると、先生の思いが生徒に伝わっていないことを指摘できる。それは、教員側に問題があるかもしれないし、生徒側に問題があるかもしれない。一方、生徒が答えた重要度の順位が教育の実態を表していると考え、しかも、生徒の認

識は教員の認識の鏡であるという仮定を置くと、生徒が答えた重要度の順位は「先生の行動の結果」であろうと考えられるから、結果として、「教員の思いが教員の行動に結びついていない」ともいえる。言い換えれば、教員は自分が重要と考える項目を生徒に教えていない可能性がある。

教員の思いが生徒に伝わっていないのか、それとも、教員の思いを教員自身が授業という実践の場で生徒に伝えきれていないのか、あるいは双方なのか分からないが、結局教員の認識が重要になる。その際、大学教員、高校教員、専門学校教員のそれぞれで教育志向が異なると判断できる結果が得られた。

以下、こうした結論にいたる推論を紹介する。

1 生徒と教員の認識ギャップ(1)

会計機能の重要性に関する順位付け

紙幅の関係で詳細は脚注1と脚注2の文献に譲る⁵⁾が、要点をまとめた図表1を示し、これを読み取る上で必要な情報を説明したい。

・高校生向け調査は協力いただいた15校の回答結果を示す。会計教員向け調査は学校を限定せず、学会等で直接依頼した教員等の回答結果を示す。前者の対象15校はテンドログラムという手法で3グループに分けられた。会計教員向

1) 科学研究費基盤研究(A) 課題番号 25245057 研究期間 2013年度から2015年度『会計リテラシーの普及と定着に関する総合的研究』, 研究代表者柴健次。

2) ①調査報告書「会計教育に関するアンケート: 高校生向けアンケート」の結果, 2015年2月19日, 15校の生徒対象。②調査報告書「会計教育に関するアンケート: 教員向けアンケート」の結果, 2016年2月9日, 全国の先生対象。

3) 日本簿記学会簿記教育研究部会最終報告『簿記教育における実験的アプローチの有効性』2002年9月, 部会長柴健次。科学研究のうちこの研究に参加していたのは、福浦幾巳と島本克彦である。

4) 我々の議論で最初にこのアプローチが有効かもしれないと言ったのは徳賀芳弘京大教授であったように思う。その後、皆で「正誤アプローチ」まで高めた。

5) いずれもドロップボックスで公開している。詳細が必要な場合は、筆者まで連絡されたい。kenshiba@kansai-u.ac.jp.

①高校生回答			質問内容 (会計機能はどこに重点があると思いますか?)	②会計教員回答			
1 G	2 G	3 G		全体	大学	高校	専門学校
2	2	2	記録機能	4	4	4	4
1	1	1	管理機能	1	2	1	1
3	3	3	情報提供	2	1	2	2
4	4	4	利害調整	3	3	3	3

図表1 4つの会計機能の重要性に関する順位付け⁶⁾

け対象は、依頼対象別に、大学教員、高校教員、専門学校教員の3グループに分けた。

- ・ 高校生の所属する学校は3グループに分類されるにもかかわらず、「会計機能に関する重要性」の順位付けがまったく同じである。一方、教員については3グループで重要性に関する認識の順位が異なる。しかも、どのグループの順位付けも高校生のグループと一致しない。
- ・ 選択対象となった会計機能を上から順に対応する科目に当てはめると、簿記、原価計算、情報会計、制度会計になろう。高校生は原価計算と簿記が重要であると考え、会計教員は(多少の差はあるが)原価計算と情報会計が重要であると考えている。

2 生徒と教員の認識ギャップ(2)

学習する科目の重要性に関する順位付け

前節に続いて、学習する科目の重要性に関する認識を比較する(図表2)。

- ・ 高校生は、図表1の会計機能の重要性の時と同じく、高校間格差に影響されることなく、科目の重要性の順位が一致している。
- ・ 一方、会計教員については、大学教員の意識が特徴的であり、高校教員と専門学校教員では財表分析と経営能力の順位が逆転しているだけで、あとは類似している。
- ・ ここで、会計教員と一括しているが、調査対象を正確に表現すると、大学教員は会計専門の教員である(というよりそういう属性を有する教

①高校生回答			質問内容 (高校の会計教育では何が重要ですか?)	②会計教員回答			
1 G	2 G	3 G		全体	大学	高校	専門学校
1	1	1	記帳技術	1	2	1	1
2	2	2	財表作成	4	6	4	4
3	3	3	財表分析	2	1	2	3
4	4	4	経営能力	3	3	3	2
5	5	5	社会責任	5	4	5	5
6	6	6	公共部門	6	4	6	6

図表2 6つの科目の重要性に関する順位付け

員に回答を依頼した。以下、同様。)。しかし、高校教員は商業教育の専門家であり、必ずしも会計の専門家ではない。専門学校の教員はその中間である。

以上、2つの比較から疑問が生ずる。会計機能の順位づけも、重要科目の順位づけも、高校生の意識と高校教員の意識が異なるのである。高校では、先生が強調する内容が忠実に生徒の認識に反映すると考えられる。大学においては、必ずしもそうならない。それを実証する統計データはないが、多くの教員の実感に近い。そう考えると、実は、生徒の意識は教員の実際の行動を表しているのではないかと思われる。そうすると、「生徒と教員の認識のギャップ」は「教員の行動と教員の認識のギャップ」ではないかと考えられる。

検討の範囲を高校教育に限定すると、高校生は、会計の機能について、第1に管理機能が重要で、第2に記録機能が重要であると考えている。高校教員は、第1に管理機能が重要であり、第2に情報機能が重要であると考えている。つまり、簿記の位置づけが生徒と教員で違うのである。一方、高校で教えられる科目の重要性を見ると、生徒は、第1に記帳技術が重要であり、第2に財表作成が重要であると考えている。生徒は「簿記」が重要であると答えている。これに対して、高校教員は、第1に記帳技術、第2が財表分析だと答えている。つまり、財表を作る事より利用する点を重視しており、教育面で言うと、簿記の直接の目的と言わ

6) 荒木孝治・柴健次(2015)「高校生の会計教育に関する意識—「会計教育に関する高校生アンケート」の分析—」『関西大学商学論集』第60巻第3号、1-19ページ。

れる財務諸表の作成は必ずしも重視されていない。

しかし、我々外部者から見ると、生徒が回答した順位付けの方が実態を表しているように思える。それは、生徒が先生の強調する内容と関係なく簿記を優先したか、先生が自身で思う重要度とは関係なく簿記を優先したか、ということになる。

3 高校教員の特徴—大学教員、専門学校教員との比較から

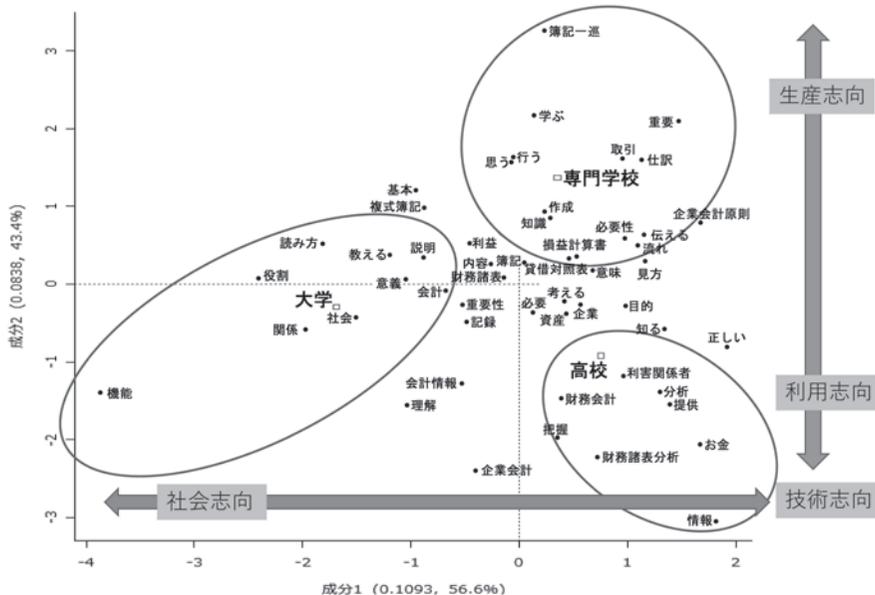
我々は会計教員に対して、時間に制約があったとしても省略すべきではない必須の教授内容を聞いた。その回答は会計教員が考える「会計リテラシーの内容」を表していると考えた。詳細は省くが、関西大学商学部の荒木孝治氏に分析を依頼し⁷⁾、各々のグループの特徴を探った。教員の記述回答を分析した結果が図表3である。図表3における丸で囲んだ3つのゾーンと、縦軸（生産志向と利用志向）と横軸（社会志向と技術志向）は、筆者が加筆した。

横軸の社会志向と技術志向とは、簿記会計を教授するにあたり、その社会的意義に力点を置くか、その技術に力点を置くかの相違を示している。縦軸の生産志向と利用志向は、簿記会計を教授するにあたり、会計情報を生産する側面に力点を置く

か、会計情報を利用する側面に力点を置くかの相違を示している。

高校教員の回答は、技術志向でかつ利用志向である右下の円内に集中する。大学教員は社会志向でかつ利用志向である左下の円に集中する。そして、専門学校教員は技術志向でかつ生産志向である右上の円に集中する。高校現場での実感に近く、我々の調査でも確認できるように、高校生は技術志向で生産志向つまり単純化すれば簿記に力点を置いているという点で、専門学校教員の志向と一致する。それに対して、高校教員は、簿記会計を教授するにあたり、技術的ではあるが、会計情報の利用の側面が大事だと考えている。それにもかかわらず、生徒にはその生産的側面しか伝わっていないのか、あるいは、教員が理想とするところとは異なり、会計情報の生産的側面に力点を置いた授業をしているかのいずれかである。

これを考えるには、高校生向け調査において協力いただいた15校のうち、1校のみが、財務分析が重要であるとした回答がヒントになる。この高校では、全クラスで班ごとにターゲット企業を決めて分析を行い、優劣を決するという企業分析を実施している。そのコンテストには、監査法人が協力している。こうした取り組みはまだ少ない。



図表3 高校教員の特徴：大学教員と専門学校教員との比較

4 高校教員の得手不得手

高校における会計教育の特徴はどうやら高校教員の会計リテラシーに対する考え方の結果であると言えそうである。しかし、それだけではない。教員向け調査では、どういう科目が得意か不得意か、理由を挙げて回答してもらった。この調査では、大学教員は主に簿記会計の研究者である教員である。それに対して、高校教員は商業教育全般を担当する中で、簿記会計の教育を担っている教員も多い。その意味で、大学教員との比較では、簿記会計に関して専門性が低く、担当する科目が苦手だという意見が出てもおかしくない。

我々の調査から「うまく行っていない科目とその理由」の一例を抽出してみたい。その際、生徒の基礎学力が低い、教員の経験が不足しているといった個人の属性に依存する回答は省く。また、「うまく行っていない科目」がない教員も多いが、ここではうまく行かない典型例に注目する。

【簿記】

- ・うまく行っていないというよりも、大変さが前に出ていると感じる。どうしても検定重視になってしまうため、気持ちに余裕がない。
- ・学力差が幅広く、照準をどのレベル（学力の生徒）に合わせて授業展開をしていくべきか自身身に迷いがあるため。

【財務会計Ⅰ】

- ・資格取得のためだけの授業になっているため。
- ・新基準・指導要領となり、指導者側にも変更点等の資料が少なかったため。

【財務会計Ⅱ】

- ・学習内容がレベル的に高く、大学の内容である。
- ・検定試験の取得を目標に据えている。ところが、2年生までの学習の理解度にそれぞれ差があり過ぎて、照準をどのレベルに合わせて授業を行ったらよいか悩んでいる。
- ・実社会での企業活動の展開や財務会計の実際が掌握出来ていない。

【管理会計】

- ・学習内容がレベル的に高く、大学の内容である。

おわりに

教育問題の論点は多岐にわたるため、限られた範囲で十分に伝えきれない事を承知で論点を絞って進めてきた。生徒の基礎学力や教員の経験のばらつきが問題を引き起こしていることは再三指摘されるが、ここではそれを論じないことにした。むしろ、一般的傾向を求めた。その点で、前節で例示したうまく行かない理由は重要である。

簿記会計は実務的な色彩が強いため、その経験を積まない教員が自信を持ってないという。しかし、問題はそこにあるより、実務の経験がなくても、簿記会計に対する教員の理解を高める機会が少ないのだと思う。指導要領の解説に依存するより、大学教員を巻き込んだ勉強会などを実施した方が良い。

第2は、授業がどうしても検定試験に合わせているため、簿記会計の本質を教授する余裕がなく、検定試験の出題範囲をこなすだけに終わってしまうという。大学教員の多くは検定試験の問題の解き方を不足なく説明するという事はないようである。では、なぜ、高校では、限られた授業回数の中で検定試験対策を行うのか。その原因をつきとめ、対策を考える必要があるだろう。

以上から、繰り返し指摘される場所であるが、検定至上主義を是正して、高校教育の内容を考える必要がある。また、高校教育として難しすぎるとの意見があるが、簿記会計教育（広くはビジネス教育にも通じるが）、高大接続を前提として、高校で教授すべき内容と大学で教授すべき内容の調整が必要だと思う。さらに、学習指導要領の改訂期にあたり、簿記会計を社会と関連づける、あるいはビジネスと関連づける発想を醸成する必要がある。

7) 荒木氏は荒木孝治・柴健次(2015)以来の協力関係にある。その荒木氏に統計ソフトRを用いて、テキストマイニングをお願いした。